

『宏智禪師広録』の「現成」について（新野）

『宏智禪師広録』の「現成」について

新野 光 亮

『宏智禪師広録』全九巻の中に、一、「現成」と云う語がどのように使用され、二、それにはどんな意味があるかの二点について考察し、諸先生方のご叱声を賜りたいと思います。

まず、出典を挙げることにしたい。

①、遇飯開口要行移脚 自是現成誰能造作。（統藏經第二編第二九套第四冊、以下省略、巻一—三三四右上）

②、頭頭和合因緣 恰恰現成公案。（同—三三七左上）

③、心心相印、法法現成。（巻一—三三九右下）

④、達磨西來、以底事現成円満而伝密密心。（巻一—三三九左下）

⑤、現成処処合頭句、具足人人知見香、（巻一—三四〇左上）

⑥、処処清白家風 人人見成活計、正恁麼時 且道、作麼生是見成受用底（巻一—三四一右下）

⑦、根々塵々無非仏事 行々歩々皆是道場、恰恰現成 無一絲毫

移易処 到者裡 祖師無分外授手底法 諸仏無分外相伝底心 元不

盈余 何嘗欠少（巻一—三四三右下）

⑧、堂堂不昧恰恰現成（巻一—三四四左上）

⑨、被一時坐却不許分疎 然而公案現成。（巻一—三四五右上）

⑩、離念見仏破塵出經 現成家法誰立門庭、（巻一—三五二左下）

⑪、見成公案 個若道拋疑結案 我知個未識玄沙。（巻三—三六一左下）

⑫、見成平等遊踐（戲）自在底漢。（巻四—三六四左下）

⑬、踏破草鞋 赤脚行見成底事 休回互不回互 大竜不受玄沙瞞

前面斑斑元是虎。（巻四—三七一 左下）

⑭、衲僧家 能恁麼現成 能恁麼變転 能恁麼受用 能恁麼方円

（巻四—三七八右上）

⑮、如何得恁麼見成受用去（巻四—三八〇 左下）

⑯、依籬木杓錢貫井索 受用見成 家風廓落（巻四—三八一左上）

⑰、地藏栽田博飯、南泉買鎌割禾 六祖負春明歷歷、金牛棒鉢笑

呵呵、見成受用、分曉來麼。（巻四—三八二右下）

⑱、物物現成觀自在 人人具足常不輟、（巻四—三八七右上）

⑲、平平坦坦 法法見成 人平不語、水平不流。（巻五—三九〇

左下）

⑳、見成公案子是須徹根徹源去（巻五—三九七右上）

㉑、通身手眼恰恰現成 方是衲僧得大受用处。（巻五—三九八左

下）

㉒、自然見成、若於一切処百雜碎（巻五—四〇一右下）

㉓、歷歷不昧 処処現成 一念万年 初無住相（巻六—四〇四右

下）

㉔、法法自然 妙超語路 見成不問。（巻六—四〇五右上）

㉕、只箇家風 処処現成 任君收拾。（巻六—四〇八右下）

㉖、公案見成知味底、一千二百衲僧家（巻八—四二三左下）

㉗、根根塵塵兮元自現成 仏仏祖祖兮何勞施設。（巻九—四五一

右下）

右の如く合計二八回であり、どの様に使用されているかについて見ると次の通りである。

現成公案(5)、恰恰現成(4)、処処現成(3)、見成受用(3)、法法現成(2)、現成底事(2)、慙麼現成(2)、物物現成、見成平等、現成家法、見成活計、自然見成、自是見成、元自見成、見成不問、各々(1)回となつてゐる。

右の様に使用法からみると「恰恰現成」に代表されるので、初めに前にあげた⑦をみることにしたい。⑦は、長蘆崇福禪院(建炎二年九月入院)での、会下の修行者に自ら努めて弁道せよと勧めている小参の一部である。

根根塵塵無非仏事、行々歩々皆是道場、

修行というとか何か日常生活とかけ離れた別のことの様に思いがちであるが、此処ではそうではない。眼で見、耳で聞き、手で触れること、その他に仏事はなく、行住坐臥に働くところがそのまゝ仏の道場である。即ち主体と客体、内と外、自と他、共に仏事に非ざることなく、我々の日常の坐作進退がみな道場である。

恰恰見成 無一絲毫移易処、

見る、聞く、話す、行く、起きる、動く、その当処に仏の相が現われる、いやそれが仏の相そのものであつて、どんな些細な事柄でも仏の相の現われないものは微塵もあり得ない。即ち、見る当処、聞く当処、笑う当処、合掌礼拝する当処が、仏の相そのものであるから「自然即物契」神、祇麼返常合道」と⑦の後に云われる。「恰恰」には、「丁度、適当、心を用いる(ねんごろ)」という意味があるが、此処では、見る当処、聞く当処の当処としたら意味がぴつたりするのであろう。

次に「現成公案」について②を見よう。②は円通崇勝禪院(神康二年四月二七年)入院での上堂語で、無心、無相(空身)ならば随处に主となり自由自在に活躍が出来ることを示している。

頭頭和合因縁、恰恰現成公案

因縁に依つて和合した種々の相は、そのまゝその当処において仏の相の現われであり、公府の案牘の如く誰れも動かすことの出来ない現前たる事実である。即ち、悟道の機縁となつた靈雲にあつては在眼曰見、香巖にとつては在耳曰聞と云うことになり、開鎖、分疎、是非、回互不回互の二辺に涉らず、しかも不染著、不造作、不勞施設の事実である。

次に「処処見成」についてみよう。⑤は卷六法語の一つであり、歴代祖師は靈明なる只箇の家風を聯連と伝えていることを示し、応ずる時は只だ応ず、照すところは只だ照すのみであるから、威儀盛んにして味ますことなく仏の家風を挙揚し、いつでもどこでも仏の相が照応されるから、仏を受用するもしないも修行者の意次第こころであることを述べている。即ち「雲無心而雨」「東方来者東方座」として任運自在、我々は十二時中、仏を眼に満ち耳に満ちて受用している。処処見成は、いつでもどこでも具体的事物を以て仏の相を現すという意味ならば、処々を物々、法法、慙麼現成と置きかえても同じ意味となる。

以上、この『広録』中には現成に対する直接の説明解釈はみあたらない。従つてその前後の語句の意味から「現成」の意味を考察した次第である。